

安彦忠彦著「自己評価—『自己教育論』を超えて—」図書文化社 1987年10月10日刊を読む

「自己評価能力の育成」5つのポイント

1. 幼時から常に自分の言動を見直し、振り返らせるよう注意する。

- (1) どんなことをやっても、どんな発達の時期でも、自他の分化を知ったとき(乳児期)から、子どもは「自分」というものを感じている。
- (2) 自分の「名前」を呼ばれることは、他の子どもや他の人と違う「自分」を意識させられることでもある。
- (3) したがって、一見、生の流れの中に没入して自分を忘れていたようなときでも、「自分」というものは感じられている。
- (4) 親や教師は、その子どもの「自分」感を成長に役立てるために、常にその子どもの言動について、「そういうことをして、どう思う?」とか、「とってもいいことをしているんじゃない?」とか、と言って、評価的な質問を投げかけるとよい。

2. 自己評価による「自信」の創出に努める。

- (1) 「自己評価」の生み出す重要な効果は、「自信」を子どもにつけるということである。
- (2) もちろん、他人、とくに尊敬する大人から評価されれば、「自信」がつく。けれどもそれだけでは、周囲の評価が変わると、「自信」も失せてしまうことになりがちである。
- (3) そういう変わりやすい自信でなく、深く自分の力を確信し、しかも頑迷や過信にならない柔軟性をそなえた自信というものは、やはり「自分で自分をきちんととらえる」ことから来る。
- (4) 子どもに、そのような自信を与えることができたと思う。
- (5) 一般的には、あることをやり遂げて、「オレでもやればできるんだ」という気持ちをもたせることが重要だといわれるが、むしろ、「このことなら、私はだれにも負けない」というものをもたせるほうが、健全である。

3. 自己評価の甘さ、辛さが認められたら、客観的な評価を対置して示す。

- (1) おうおうにして、思春期までの子どもは、自己評価が甘い。逆に、思春期の子どもは自己評価が必要以上に辛くなりがちである。
- (2) このような自己評価の主観性を、過度なものにならないようにするために、ときに客観的な評定をして、本人に示す必要がある。それは、その評価対象が何によるかで異なり、人のことばや行動で示すこともあろうし、検査をして定量的に数値やグラフ、データで示すこともあろう。
- (3) 自己評価が、単なる思い込みから何らかの形で客観的な有効性をもつには、やはりこのような第三者によるきちんとした評定との組み合わせを必要とする。
- (4) ただし、「時々」である。そうでないと「発達」が健全にならない。

4. 何か一つ「めあて」となるものを決めさせ、それに向かって個人的な努力を尽くさせ、それを個人内絶対評価するようなプログラムをもたせる。

- (1) 今日では、到達度評価の長所が認められているが、このような評価をさらに個人別に認めてやり、自分のやりたいことを、自分でできるかぎりやらせてやり、その「めあて」に到達できたかどうか、ということだけで自分を評価させることが経験できるプログラムをつくとよい。
- (2) それは、あくまでも個人個人の枠内のことであって、他との比較は無意味となる。
- (3) 仮に本人がそれを望んでも、それによって得るものが何かをよく話し合っ理解させておく必要がある。

5. 自学自習＝「個別自主学习」の方向に向けて、すべての教育を計画化する。

- (1) 生涯学習の時代だということからくるよりも、もっと直接には「一人前」になることがねらいであるといつてよい。
- (2) 少なくとも中学校で義務教育が終わる現制度のもとでは、中学校終了時に、いちおうの「一人前」の姿が描かれなければならない。
- (3) 現代では、学校を終わっても、「自学自習」「自己学習」「自己教育」「独立学習」などという表現でいわれているような、「社会へ出てからも学習し続けることのできる意欲と能力」をもっている姿、それが「一人前」の姿であるといえる。
- (4) この点で、学校教育はもっとはっきりと「自学自習の能力」を身につけさせる「個別自主学习」を目標として明確に掲げるべきである。

6. 以上、5つのポイントを示した。これですべてが尽きているわけではないが、主要な点はカバーしている。

- (2) 「自己評価能力」は、単に個人のレベルにとどまらず、さらに「自分たち」という複数のレベルへと高まり、広がらなければならない。
- (3) それが、どこまで広がりうるかが、その個々人の自己評価能力の質の高さ、評価対象の次元の深さを示す。
- (4) 「同じクラスの自分たち」「同世代の自分たち」「国レベルの自分たち」「世界レベルの自分たち」と、自己評価の対象を広げ、高めていけて初めて、それが一国の「国民的教養の高さ」を示すものとなる。今後の時代と世界はそういう人間を必要としている。

P98 ~ 101

<コメント>

日本カリキュラム学会元会長で、教育評価の第一人者である安彦忠彦(あびこただひこ)先生による「自己評価—『自己教育論』を超えて—」は、日本における「教育評価」の古典ともいえる基本テキスト。この『自己評価能力の育成』5つのポイントは、「自己学習能力の育成5つのポイント」と読み替えれば、開倫塾の教育目標である「自己学習能力の育成」に大いに役立つと考えます。安彦先生の古典的名著から大いに学んでまいりましょう。

2021年3月25日(木)林明夫